

『日本学術会議会員任命拒否問題フォーラム』開設の主旨について

日本中東学会会長 大稔哲也

去る10月2日に政府による日本学術会議新規会員の任命拒否が明るみに出て以来、日本中東学会理事会でもこの問題への対応に多大な労力を割いてきました。本学会単独で声明を发出したほか、地域研究学会連絡協議会や人文・社会系学協議会連絡会を通じても共同声明に参加しました。いずれも瞬時の対応を求められたため、理事会名や会長名による发出となっています。

その後、2か月以上が経過しても、依然として、なぜあの6名だけが任命拒否に遭ったのかは、一向に明らかにされておりません。また、過去の政府答弁や日本学術会議法との整合性についても、明確な説明は得られておりません。その間にも、問題の論点ずらしや誤情報の流布が横行しています。この問題は政治的な立場に関係なく、多様な価値観を認め、真理を探究して国際的研究を推進する本学会にとって、決して看過できないものです。

コロナ禍に苦しむ日本社会へ不要な分断を持ち込み、日本を代表する学術アカデミー活動の「顔」であり窓口である学術会議の活動を阻害している現状は、日本の国際的な学術活動にマイナスをもたらしており、日本の学術イメージを損なうことにもつながりましょう。

また、中東における学識者や学術活動の置かれた立場を良く知る我々は、この問題に対してより自覚的である必要があります。ひとたび時の政権の恣意的な判断によって学術活動へ圧力がかけられ始めると、その先に見えてくる世界がいかなるディストピアであるか、我々は中東の事例から身をもって体験しています。多様な意見に耳を傾ける度量を保持することは社会の生命線であり、最終的にはその社会の繁栄と安寧にもつながります。

学問やその多様性を大切にしない国が亡びるのは必定です。逆に、現在中東と呼ばれる地域は、オリエント・エジプトはもとより、ギリシア・ローマ、インドなど、古代から綿々と連なる多様な文明を貪欲に吸収することによって、我々が今日恩恵に与るような科学技術・文明を発展させてきました。そして、閉じた体系を志向するようになった時には、すでに衰徴が生じていました。

本学会は日本学術会議の協力団体の一つとして、これまでも同会議をサポートしてきました。また、現在も、複数の本学会員が同会議の会員・連携会員を務めています。しかしながら、日本学術会議の活動内容に詳しくない本学会員も多いことでしょう。実際に、その活動内容が良くわからないという若手会員からの発言も仄聞しています。そこで、本学会員であり、これまで日本学術会議の会員として尽力して来られた方々をお願いして、学術会議の活動内容と、本学会の活動とのかかわりについて具体的に述べてもらい、より広く会員にこの問題の本質について理解を深めていただきたいと考え、本フォーラムを設けることに致しました。

こちらからの依頼に応じて、栗田禎子元会長、板垣雄三元会長、小松久男元理事が文章をお寄せ下さいましたので、ここに深く感謝の念を示しつつ掲示させていただきます。また、今後、さらに論者を増やすことも考えております。どうか、引き続き、ご理解とご協力を賜れば幸いです。(2020年12月15日)